協同の歴史の瞬間　第105回

賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」（その9）

1934（昭和9）年10月号
処女会と青年団合同の学習会を企画するも成立せず。
1934（昭和9）年11月号
医療組合の必要性を痛感、村の更生に向けて動き出す。

監修　**堀越芳昭**
山梨学院大学　元教授

処女会と青年団合同の学習会が開催されることになったが、多くがかるた取りに参加し学習会は成立しない。東助は、村の青年たちの緊張感のなさに失望する。

そこに母の病気の知らせが届く。七転八倒する母を助けるため喜多方町まで行って医師に往診を依頼するが受けてもらえず、医療組合の必要性を痛感する。

その母が元気になると、東助は動き出す。まずシイタケ作りにはじまり、コイの行商の話が一気に現実化し、おおいに成果を上げ鯉販売組合を作る。さらに処女会の会員を対象にホームスパンを副業とするための教室を開く。これらはそれまでの大塩村にはない取り組みで、村の更生につながると期待された。

処女会と青年団合同の学習会、成立せず

前の晩に、東助は田中高子と島貫伊三郎の強い要望を受け、処女会と青年団合同での産業組合に関する学習会の講師役を引き受けたが、当日の晩定時になっても会場である田中高子の家に集まってきたのは処女会の二人のみであった。

やきもきしているところへかるた取りが開かれている柿ノ木の新宅の息子の徳太郎が

「おばさん、島貫さんがね、みんな、青年団の人も処女会の人も、柿ノ木のほうへ集まったから、高子さんも東助さんも、うちへ来てくださいって」

それだけのことを言うと、少年はすぐ表へ消えていってしまった。

囲炉裏のそばで、その伝言を聞いた東助は、

「――これだから、村はいつまでたっても救われないんだなあ。村の青年は緊張を欠いているよ。農村の更生のまじめな話より、かるた取りのほうがおもしろいとみえる」

と、つぶやくようにひとり言を言った。

前の晩、東助の話を聞いた島貫は「**この村には産業組合さえない。それが疲弊の原因なのだ。一つわれわれが奮発して作ろうじゃないか**」と東助に熱っぽく語りかけてきた。その島貫の行動に大きな打撃を受けたであろう。そういう東助に、さらに難題が降りかかる。

母の病気で医者に往診を依頼するも叶わず。医療組合の必要性を痛感する。

失望のうちに田中高子の家を出て雪の中を歩いていた東助は、桧原に働きに行っている弟の六三郎を見つける。桧原からスキーで家に帰っていたのである。

「東助にいさん、今、にいさんを呼びにいくところだったんだよ。おかあさんが、にいさんにすぐ帰ってきてくれって言っているよ。さっき便所に行こうとして、縁先ですべってけがをしたんだって、にいさんにお医者を早く呼んできてくれって」(略)

家に帰ってみると、母は、七転八倒して座敷じゅう転がりまわっていた。縁先で倒れたとき、どうしたはずみか、腰を打ったらしく、腰が痛いといって、目から涙をぼろぼろ落していた。

医者を呼ばずになおる病気であれば、と思いながら帰ってきたが、苦しんでいる姿を見て、どうしても、医者を呼んできてあげたいと思った。しかし、その医者が、三里も離れた喜多方町に行かなければいないし、この大雪では、呼びに行くだけに四時間以上はかかるだろうと思うと、急なばあいに間に合わなかった。それに、雪の中を、医者に来てもらうとなると、往診料に、どうしても、片道十円以上を支払った上、自動車代を別に出さなければならない。そんな金はどこを捜したって、彼の身にはついていなかった。

(これだから、医療組合がなければ村の経済が立たないというのは、ほんとだ。ああ、天は、じつに無情だなあ。)

嘆きつつも、田中高子の家にもう

一度飛んで行って、ウマとそりを借りてくることを思いついた。ウマとそりを貸してくれた上に、高子ほか二人の処女会メンバーが、母の看護をしてくれることになった。

ウマは走り、そりはすべって一時間たらずのうちに喜多方に着き、村の人に存外受けていた医者を訪ねた。碁石の音がパチパチするにもかかわらず、看護婦は「**先生は、今夜、頭痛があって、早くお休みになっておられます。ほかのお医者様を頼んでください**」と往診を断った。

次の医院では、応対に出た書生に東助が事情を話すと、

苦り切った若い医者が、酔っぱらった顔をして、玄関口に出てきた。そしてそこに突っ立ったまま、往診料往復二十円だけ前納してくれと、現金なことを言いだした。

東助はグウッとしゃくにさわったが、涙をのんで沈黙したまま、ていねいにおじぎをして表に出た。

（この広い世界に五円ぐらいで大塩村まで往診してくれる医者はないかなあ。こんなときに医療組合があれば、どんなに助かるかもしれないがなあ）

東助は、ここでも医療組合の必要性を痛感した。結局、東助は大塩村まで引き返さざるを得なかった。家に着いた東助に処女会メンバーたちは「お医者様はどこ」と尋ねてきた。事情を話した東助は逆に母親の様子を尋ねた。「こんにゃくを熱くして湿布をしてあげたら落ち着いている」とのことで、東助が枕許に近づいて様子を見ると、「**不思議に、彼女はすやすや眠っていた**」**のであった。処女会のメンバーは「もうおかあさんは、あれでお痛みが止まったとみえますからね。こんどお痛みのようでしたら、こんにゃくを暖かくして、お背中に当ててあげてください**」と助言して、去っていった。これが効いたのか、母の苦痛も、けろりと忘れたように納まった。

村の更生に向けて

母が元気になると、東助が動き出す。東助がまずやろうとしたことは、去年の夏、山越えして信州に行くとき、南会津の炭焼き小屋で杣人（そまびと）万吉に教わったシイタケ作りであった。

その方法とは、種木を一寸角に切って、ナラの幹にはめ込む、という新しくかつ簡単なものであった。それを聞いた木内老人はおおいに共鳴し、自分の所有している山林のナラを提供してくれ、「**シイタケ組合でも作るかね**」と積極的であった。

東助はさらに木内老人に「コイ売りをしたい」と相談する。アドバイスしてくれる老人に

「**おじいさん、仲間でやろうか？　おれが、そりを引いて売って回るから**

ね、あんたは仕入れに回ってくれよ。そして雪が溶けると、少し、この村の渓流を利用して、コイを飼おうじゃないかね。群馬県は盛んだったなあ、まったく驚いちゃったよ。この村が衰微するのはあたりまえだなあ。やれば、いくらも方法があるのに、みんな研究をしないからいかんのだよ」

木内の老人は、さっそく立ち上がった。そして、柿ノ木の省七から、百貫ぐらいまで、コイを卸してくれるという交渉をつけてきた。そのうえ彼は、コイを入れる桶まで二つ借りてきた。

シイタケ作りのはめ木もすんだので、東助は、すぐコイの行商の準備に取りかかった。

こうしてコイの行商の道が開けると、「**あすからにせよ**」という木内老人の言葉も聞かず、東助は、高子の家から、ウマとそりを借りてきて、そりの上にコイを積んで喜多方町に行商に出た。かつて信州上田で魚の行商をしたこともあって、うまく進んだ。

午後四時過ぎ家を出た東助は、わずか一時間足らずのうちに、三軒の料理屋を回り、五円だけ仕入れたコイを全部売りつくして、三円二十銭の利益を得て、電灯が灯ると間もなく、大塩まで帰ってきた。

東助は、会津若松まで行商に出かけよく売れ、その結果、東助のもうけは、毎日二円五十銭を下らなかった。それを見て柿ノ木の省七も仲間に入れてくれと申し込んできた。東助はそれを了承し、はじめて鯉販売組合という名称を用いることにした。さらに処女会の副会長の高井米子までが、鯉販売組合の仲間に入れてくれと言ってきたのである。

しかし、東助の考えでは、女には、別に、皮細工や羊毛のホームスパンを副業として教えたがよいと思ったので、彼は、信州小県郡神科村で見たホームスパンの機械を東京から取り寄せることにした。そして浦江夫人に手紙を書いて、往復の三等旅費を送るから、羊毛のホームスパンの先生を送ってくれと依頼してやった。

送られてきた先生は、高円寺消費組合の店にしばしば買いに来てくれた里村千代子女史で、東助はその先生をよく知っていた。ただ、ホームスパンの先生とは知らなかった。

それから約三日間、田中高子の家に泊り込んだ里村女史は、十六人の処女会の会員に午前八時から午後四時まで、熱心に羊毛の紡ぎ方と、紡いだ毛糸で毛織物を作る機（はた）の立て方を教えてくれた。娘た

ちの多くは絹機（きぬはた）に経験があったので、のみ込みは早かった。

里村女史はていねいに染色の手引きまでしてくれた。羊毛が足りなかったので、アンゴラウサギの毛を会津若松で買ってきた東助は、娘たちに、副業としてアンゴラウサギを飼うことを勧めた。

「しかしね、これも組合で飼わなければ、一匹や二匹飼ったんではだめなんだよ。みんな今まで、村の人がばらばらに仕事をするものだから、もうからないんだよ。これからは、ウサギを飼う場合でも、コイを飼うばあいでも、みんな組合を作ってやろうよ」

と呼びかけた。全員が賛意を示し、高井米子までが「これじゃあ、この村も、もうすぐ更生しますね」と東助に言った。

村の更生に向けて、期待が高まっていった。

＜参考文献＞
『家の光』（昭和9年10月号、11月号）
＊文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』（2009年）を参考にした。